

議会は変わるか

● ④ ●

「議会経費の公開」〇

「議員提案件数」△

町議会のホームページ（ＨＰ）上にこうした評価が並び、自ら設定した項目ごとぶ。〇は一定水準に達したことを、△は一部水準に達していないことを表している。▲はさらなる取り組みが必要であることを示す。

いわば、議会の通信簿だ。北海道の最南端に位置する人口60000人足らずの漁業の町、福島町では平成17年度から、全国で初めて議会（定数14）と議員をそれぞれ対象とした自己評価制度を取り入れた。「地方

代表。議会の力を強くしていかねばならない」。議会改革の旗振り役を務めた溝部幸基議長（59）は熱を込めた。

込めた。

議員個人、議会がそれぞれ1年間の活動を振り返り、自ら設定した項目ごとに「〇」「△」「▲」の3段階で評価する。これまで17年度と18年度に2回行われた。

溝部議長が自己評価にこだわったのはわけがあった。各地で平成の大合併が進められていた16年、町は隣接する松前町との合併を模索したが、ご破算になった。また町の試算で単独町制では21年度に夕張市と同じ財政再建団体に転落する恐れが出て、町当局は17年

自己評価制度

12月に行財政改革のプランを作った。

自己評価は、危機を乗り越えるために議会側も改革の熱意を住民に示し、「議会も汗をかいている」ことをアピールする手段として必要だったのである。

「次の選挙までの4年間を漠然と過ごすのではなく、1年ずつ評価することで次の年の目標もでき、意識が変わった」

19項目中、「△」を14項目につけ、厳しい自己評価を下した平野隆雄議員（58）はこう振り返り、制度導入の利点を説明した。

しかし、強制ではないため、過去2回とも14人の議員中、自己評価を提出したのは8人にすぎない。また議員への評価では、自由に項目を設定できるため、例えば同じ財政分野の項目で

も、ある議員は「人口推計が甘い財政計画への指摘」に△をつけ、別の議員は「ごみダイエット大作戦について」一般質問したとして〇をつけている。項目が議員によってバラバラで、相対的な評価ができないのだ。

2回とも自己評価をしなかった元町収入役の成田民夫議員（73）は、「議員を評価するのは第三者の町民で、それは選挙だ。自己評価を町民が支持してくれればいいが、何のためにやるのかはつきりしない」と批判する。

三重県の改革を進めた北川正恭元知事が代表を務める、地方議会改革を進める「ローカル・マニフェスト推進ネットワーク」の木原勝林関西代表は、福島町の是非について審判が下される。

自己評価導入が、議会の足腰を強くして危機を乗り越える力になるのかまだ不透明だが、今年8月に行われる導入後初の選挙で、

も、「評価には第三者の目を取り入れるべきではないか」と提言する。もちろん溝部議長は「議員評価は、経過を重視すれば甘くなる。結果を重視すれば厳しくなる。議員によって評価の基準が異なることとなる面もある」と過渡期ならではの問題点を認めている。

議員の「意識改革」促す